

過疎化する地域社会の生活と交流 —鹿児島県南大隅町佐多地区の現状から—

藤 川 賢

1. はじめに

少子高齢化は現代日本における全国的な課題であるが、その現状には地域差が大きい。いうまでもなく、もっとも深刻なのは山間部や離島をふくめた辺境の地であり、人口減少と高齢化が一定の割合に達した地域は「限界集落」などと呼ばれることもある（大野2005、2008、玉里2009、曾根2010、山下2012）。1960年代以来の課題であった地方の過疎化が全国的な人口減少時代をむかえて深刻さを増していると言えるのかもしれない。人口急減による集落の消滅はかねてから生じていたことであり（今井1968：87）、「限界集落」の定義や分類にも疑義が示されているが（山下2012：25-32）、過疎化の進む地域社会の維持が現代日本の大きな課題であることは否定しがたい。

ここでいう地域社会の維持には、おそらく二つの側面がある。一つは、そこに住む人たち特に高齢者の生活が、いつまで、どのように維持できるかという課題である。単身世帯の高齢者の多くは、一人での生活ができなくなると子ども世帯の家や施設などに移ることになるのだが、いつまで自分の家で住みつけられるかは本人の健康や生計・生活力にかんする条件だけでなく、地域社会の条件によっても左右される。たとえば、通院していた病院の閉鎖によって転居を余儀なくされる場合などである。こうした意味での地域生活の維持可能性が問われて

いる。

関連して二つ目に、地域の維持そのものが問われることになる。ある集落の中で、現在は80代の女性が一人暮らしを続けていられるとしても、それは周囲に自分より若い世代の人たちが住んでいるからである。人口減少が続いているところでは、20年後には、80代の人が集落の過半に達するかもしれない、そうなっても自分たちで集落を維持できるのかは、現状とは別のこととして考えなければならない。

本稿は、こうした観点から鹿児島県南大隅町佐多地区における高齢者の生活について考察するものである。まだ十分な調査ができたわけではないが、今後の勉強を継続させるためにも現時点での中間的なまとめを行っておきたい。

佐多地区は、大隅半島の南端に位置し、鹿児島からフェリーと車で約2時間、大隅の中心である鹿屋市からでも車で約1時間と、都市からは離れたところにある。多数の観光客が訪れた時期もあったというが現在はその面影もかすかに残るばかりで、目立った商工業施設もなく、また、平地も少ないことから、畜産などを中心とする比較的小規模な農業と漁業が基幹産業である。そのためもあって、早くから人口減少が進んでいる。1991年に発行された『佐多町誌』もその冒頭で次のように概観している。

「佐多町の人口は、昭和25年～30年代初期をピークとして、その後減少を続け、平成元年の

人口はピーク時の約半数に減っている。これは、人口の自然減とともに、特に高度経済成長期に我が国の産業構造の大きな変化にともない、青壮年層の男女が都会地の商工業に流出吸収されたことが主な原因で、本町に限らず全国的な傾向である。また中高卒者の進学・就職による町外・県外転出が急増し、人口減の拍車となるとともに、若年層が著しく減少している。

この過疎化現象は、町の産業経済・教育面などに大きな影響を与えている。⁽¹⁾

1990年の国勢調査人口は5,186人で、上記にあるように1950年の11,494人から半減しているが、その後も人口減少は続き、2010年の人口は2,749人となっている。この20年で再びほとんど半減したことになる。なお、2005年には旧根占町と合併して南大隅町になった。その町役場は根占地区に置かれ、佐多町の旧庁舎は「佐多支所」となっている。後に触れる小中学校の統廃合などもあわせて、過疎化が加速していることは否めない。陽光に恵まれ、緑の濃い佐多地区は、穏やかで生活しやすい場所であるが、住みづけることも難しくなっているのだろうか。

以下、2節では佐多地区における高齢単身世帯の女性の生活について紹介する。その中で触れる通り、70代ないし80代で単身となって佐多に住みづける女性はこの地域の人口構成の中で大きな特徴を示しており、この方々が元気に生活できる環境を維持することが、地域の存続に深くかかわっているからである。3節では、アンケート調査の結果を参照しながら、もう少し広く佐多の生活について特徴を確認する。その中で重視されるのは、まず産業とくに農漁業の位置づけであり、もう一つは子どものもつ意味である。両者は互いに深くかかわりあっており、産業が生計をたてるに十分な状態になれば地域が子どもを育てられないし、後継者の有無は地域の産業の盛衰を左右する。

佐多の事例を踏まえて4節では、他地域にも通じる過疎化の歴史的特徴について考察したい。佐多で指摘される過疎化の兆候は日本全国に共通するものであり、極端なことを言えば東京周辺でさえ、まったくの無縁とは言い難い。とすれば、人口減少時代における地域の維持可能性は全国的な課題だとも言える。そして、全国的な取り組み、ないし意識の転換こそ、過疎化した社会を成り立たせる転換点になり得る。これは仮説にすぎないが、今後、それを現実とかがかわらせるための道筋を考えて、5節のむすびとする。

2. 佐多地区における高齢者の生活

2-1. 佐多地区の集落形成とその特徴：辺塚を中心に

旧佐多町は、佐多、島泊、大泊、竹之浦、郡、大中尾、辺塚という7つの校区に分けてみることができる(佐多町誌編集委員会2005:4)。後述のように小学校の統廃合が進んでいるし、各校区のなかでも離れた集落は存在するのだが、地域の人たちの意識においても重要な区切りであることは間違いない。この7校区のうち、大中尾は半島の中央付近にあたる大地を占めており、酪農を中心とする農業地帯である。他の6地区は半島を囲むように、入江を分けて点在している。集落の規模はそれぞれの入り江が形成する平地の大きさや数などによって左右される(末尾の地図を参照)。

7校区の交通の便には明確な特徴がある。というのは、錦江湾に面して、根占や鹿屋に近い佐多(その中心である伊佐敷)が交通の中心であり、道路やバスは、佐多を中心に海岸沿いもしくは内陸の大中尾を経由して形成されるからである。そのため、日向灘に面して旧佐多町の東北端を占める辺塚は、錦江町や旧根占町との直線距離はそれほど遠くないにもかかわらず、

現在の交通体系では旧佐多町の一番奥にある印象を受ける⁽²⁾。

これは、少子高齢化とも深くかかわっている。1962年に佐多を訪れた宮本常一は、「佐多町はまずしい町である。とくにそのいちばん僻地にあたる辺塚小中学校では、教員の出張にあたって必要経費の二割しかもらえない」と書き、次のように述懐する。

「とにかくこうした僻地の村に活気を与えることは教育だけでは不可能に近い。今年（昭和37年）も中学校卒業者は30人あった。そのうち5名が南大隅高校（根占町）と鹿屋農業高校へいった。下宿か親戚に宿をかりて通学するという。この人たちはもう村へはかえって来ない。学問をすることはその家にとっては大きなプラスになるであろうが、村にとってはそれだけの金が持ち出され、本人はかえって来ないのだから、村のエネルギーにはならない。女の子は紡績工場へゆき、家にのこっているのは一人だけであるという。」（宮本1995：79-80、かっこ内は原著、引用にあたって数字の一部を算用数字にあらためた）

あとで触れる通り佐多の小学校は2013年に統廃合され6校から1校（佐多小学校）になったのだが（島泊小学校は1982年閉鎖）、辺塚小学校だけは一足早く2009年春に休校になった。最後の卒業式にのぞんだのは6年生2名と、転校する4年生1名の計3名だったという。生徒数減少の傾向は他地区も同様で、統合以前、佐多小学校は50人弱の在校生がいたものの他の4校は10人前後もしくはそれ以下だった。なお、50年前にはこれら4校とほぼ同規模だった辺塚小学校が一足早く休校になったのは、生計をたてられる産業が少なく、職場のある町まで遠いことにかかわると考えられる。

辺塚をはじめとする旧佐多町の多くの集落は田畑や漁業を専業で続けるには大規模化するた

めの面積が小さく、主要な観光ルートからはずれる上、宿泊客はきわめて少ない。平家落人伝説も残るほど他所からは隔絶した地域である一方、自然の恵みもあるので、自給自足を軸として必要に応じて出稼ぎや臨時仕事で現金収入を得れば生きていける。そうした生活のあり方が、時代の流れの中で、急速に成り立たなくなってしまうことが、この地域の極端な少子高齢化をもたらしたのだと考えられる。

2-2. 辺塚での聴き取りから

標高930mの稲尾岳を近くのにぞむ常緑樹林の濃い緑と、小規模な入江が連なる海岸、その間で平地から棚田へと続く水田という集落形成は、旅行者の目には懐かしい農村の美しさを感じさせる。その景色に魅せられたのと、辺塚のある集落では16戸30人の住民のうち10戸が一人暮らしという高齢化が進んだ状態の中で地域が維持されていることが印象深く、われわれは2度、辺塚を訪問した。そこで、一人暮らしの方としては集落で最高齢という80代の女性お二人に日々の生活について話をうかがった。そこから、この紹介を進めたい。

お二人は、ともに辺塚の出身で、お一人は一時福岡に住んでいたこともあるが人生の大半をこの地で過ごしている。お子さんは二人ずつ、それぞれ、根占と鹿児島、鹿児島と大阪に在住で、毎週ではないが週末に訪ねてくる。そのほか、近くの親類が顔を見に来ることもある。牛を飼っていたことがあるかどうかなどの違いはあるが、ともに20年ほど前まで小規模な田畑をたがやしていた。現在の生活についても、それほど大きな違いがないので、以下、お二人を区別することなく、日常の生活を追ってみよう⁽³⁾。

朝は、だいたい6時ころ起きる。庭先をぶらついたり、テレビを見たり、家から出ることはほとんどない。買い物は、木曜りと土曜日に運

行するバスに乗って佐多に出るのだが、毎週行くことはない。通院も同じく佐多に月に一回くらいである。そのほか、ママさん号という移動販売車が毎週来るので、日用品などはそこでも買う。また、牛乳も週に一度の宅配がある。買う食材は、野菜やわかめ、豆腐、卵などで、肉、魚、牛乳などはたまに買う程度。魚は一匹でももてあますので、小さな切り身が多い。野菜など具だくさんの味噌汁とご飯という献立が中心で、たまにほかのおかずをつくるということになる。

2、3年前までは庭先で野菜をつくっていたが、足が痛くて、それが難しくなってしまった。老人会も、いまは入っていない。集落の草刈りや忘年会などの行事も、なかなか参加できなくなってしまった。

「(行っても)一緒に仕事ができないから。後から行ってな、行って、見ているだけ。」

いまの楽しみは、友だちと会って話をする事だが、訪ねていくことはできないので、買い物や通院、あるいはこうした集会のときに顔を合わせるのを楽しみにしている。20年ほど前までは、牛や鶏を飼い、田畑をつくり、婦人会などで料理をしたり、たいへんだったけれど、楽しかった。それができなくなったのは、動物による被害の影響が大きい。

「鶏(を飼うのは)、柵をしてな、放し飼いはだめって言われて。多いときは2、30羽くらいおったね。卵はとれたよ、卵は買わなかった。飼うのを止めたのは20年位前、だいぶ(以前)になるな。村の人がいっせいにやめた。けだものがおったらからな、イノシシじゃなくてイタチがね、相当おった。籠の中を見てみるとね、イタチは小さいものだから(入って食べてしまう)。(それ以前の被害は)、それほどではなかった、(昔はイタチを)取る人がおったからな。取る人がおらんようになったら、イタチが増え

て。

(サルも)恐ろしいよね、家の実を荒らして回るから。橙とかミカンを取ってね、もう、恐ろしいよ、人間がおっても逃げもしないから。顔を見ても平気。それからイノシシも出てくる。人間より動物が多くなって、たいへんな世の中だ。」

お話によると、そのころから過疎化にかかわる村の楽しみの減少が深刻になってきたようだ。このように農漁業が難しくなり、他方では子どもが減って伝統行事も次第にやれなくなってしまった。10数年前から子どもを主役とする行事ができなくなり、その後、力仕事を要する集落総出の行事も規模を小さくして、何人かの代表が行うように変えてきた。そして、何年前からは集落の婦人会もなくなった。

こうした変化の中で、お二人は、自分としては歩けなくなるまでここに住みつづけたいけれど、子どもに戻ってきてほしいことはないという。

「(子どもは)定年にはなっている。(だが、辺塚に帰ってきてほしいことは)ない。向こうに家も立てているし、こっちに何も楽しみがないからね。畑つくったり、田んぼつくったり、そういうのがあれば楽しみだけだね。」

2-3. 佐多の高齢者とその生活

佐多の生活を考えるにあたって高齢女性の単身世帯から考察を始めたのは、車の使用が困難な人が多いなど、体力や経済力を含めて生活を支える地域のサポートへの需要が高いという理由のほかに、高齢女性の多さが佐多の人口構成における重要な特徴だという理由がある。2010年度の国勢調査によると、全国の平均年齢が44.96歳であるのにたいして、南大隅町全体では56.23歳そのうち旧佐多町では61.29歳になっている。とくに女性は、64.46歳となる。65歳以上

過疎化する地域社会の生活と交流

人口の割合いわゆる高齢化率も、全国の23.0%にたいして、南大隅町は43.5%、旧佐多町は52.9%と、その違いが顕著である。旧佐多町の女性の年齢別人口比率をみると65歳以上が61.0%（男性は43.0%）を占めている。つけ加えると、75歳以上が42.6%（同26.3%）、85歳以上12.5%（同5.1%）と、長寿の女性が多いことも特徴である（図1参照）。

また、佐多では3世代同居が少なく、1410世帯のうち、一人世帯が589戸、二人世帯が558戸と81%に達する⁽⁴⁾。これらの結果、子どもが独立別居した後は夫婦二人世帯、夫の死後は女性の単身世帯という割合が高くなるのである。これは、のちに紹介するアンケート結果にも如実に表れている。4節で再び触れるように、定年後の世代が故郷に戻ることで過疎化しつつある社会を維持するというパターンも一定以上の辺地では難しく、こうした極端な高齢化社会をもたらしている。

では、こうした高齢者の生活を分ける要因にはどのようなものがあるだろうか。やはり、最

大のポイントは健康にあるようだ。佐多では60代は若手に位置付けられ、70代でも元気な人の方が多い。80歳くらいから元気な人と病気がちな人とに分かれていく⁽⁵⁾。寝たきりになってしまえばほかの人の世話になるしかないが、多少の不具合であれば一人暮らしを続ける人も少なくないという。そうした場合、農漁業には他の職業より有利な場合がある。一つには、畜産などが盛んな地域では近くに子ども夫婦が住んでいたりと、定年後の子どもが戻ってきたり、という例が多い。他の職業では、子ども世代は地域外に就職するしかない。もう一つには、わずかでも農作業や家畜の世話をしていれば家に閉じこもらないので健康にもよいし、食費の助けになる。

他方、農漁業には経済的に厳しい点も多い。上述した養鶏も、獣害のほかに、卵の販売額が飼料代より安くなってしまったことが、衰退の一因だった⁽⁶⁾。また、退職後も、厚生年金がなければ、国民年金の最低額はほぼ2カ月に5万円であり、光熱費などを引くとほとんど残らな

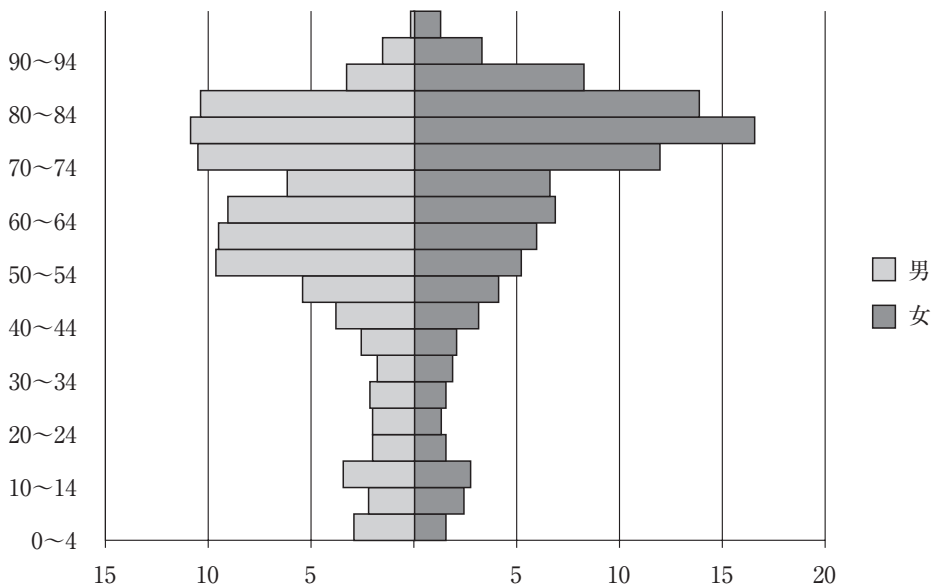


図1 旧佐多町の人口構成 (2010年国勢調査結果による、単位%)

い。

これらは、地域での交流にも深くかかわる。たとえば、上記で紹介した辺塚の集落では、昔からユイの慣習があり、農作業も助け合って行うことが多いという。

「私も、今朝、午前中から仕事したんですけれど。隣近所の人たちがすぐに集まってくれました。声をかけてないですが自然と集まってきて。わかるわけですね、タイミングが。今日は5名ですか、集まってくださって。だから、1日する予定が午前中で終わったんですよ。

(共同の農作業が交流にもつながっている)ここも、会わないときは、全然(人と)会わない日がありますよ。だけど、人が何か忙しそうなお仕事をしていると思えばいきますし。人が稲刈りをしていれば見た人がすぐ加勢に行ったりとか。昔のユイ制度かな。ユイ制度みたいな、そういう感じですね。」⁽⁷⁾

同じように、野菜の交換、海や山の漁(猟)でとれたものの交換も盛んにおこなわれている。ただ、動けなくなってくると作業の手伝いにも行けないし、ユイも交換も、してもらえばかりでは気が重くなり、どうしても付き合いが悪くなってしまう。そういう意味でも、健康が重要な意味を持つのである。

3. 佐多の生活と地域社会

3-1. アンケート結果にみる高齢者の生活評価

本節では、佐多地区で実施されたアンケート調査の結果から佐多地区の地域生活の概況を見ていく⁽⁸⁾。それに先立って、まず確認しておく必要があるのは回答者の年齢的な偏りである。表1に示したように、ほぼ同じ調査票でアンケートを行った港区に比べて明らかに平均年齢が高い。とくに女性は平均年齢が約73歳と高く、分散の小ささも回答者の偏りを示してい

表1 アンケート回答者の年齢分布

	佐多		港区	
全体	度数	645	度数	2506
	平均値	69.59歳	平均値	55.40歳
	中央値	73歳	中央値	56歳
	分散	173.46	分散	289.43
女性	度数	241	度数	1573
	平均値	72.99歳	平均値	55.12歳
	中央値	77歳	中央値	55歳
	分散	176.12	分散	295.19
男性	度数	399	度数	927
	平均値	67.50歳	平均値	55.91歳
	中央値	70歳	中央値	57歳
	分散	161.92	分散	279.38

る。この最大の理由はアンケートが世帯単位で実施されたため、世帯主の男性による回答が多かったからだと考えられる。女性の回答は単身世帯に偏るため、さらに高齢の回答者が増えている。とはいえ、女性の高齢化率の高さが佐多地区の現状を反映していることは上述の通りである。関連して述べれば、家族数の小ささも佐多の特徴の一つで、本調査でも、全体の34.4%が一人住まい、48.9%が二人住まいであった⁽⁹⁾。

次に仕事と収入との関係を見ると、60代以下では男女とも過半数が「現在仕事をしている」ことに大きな違いはないが、それより高齢では差が広がる。男性では70代の38.6%(44名)、80代の27.3%(18名)が仕事をしていると回答しているのに対して、女性ではそれぞれ18.9%(14名)、8.3%(6名)と、減り方が大きくなるのである。先に触れたように、とくに女性の単身世帯では農作業が難しいことが影響していると考えられる。これは、収入ともかかわる。男性の回答者は2人世帯が多いこともあって世帯年収100万円未満の割合が70代、80代でも4割程度であるのにたいして、女性の回答者のうち、70代の63.5%(33名)、80代の75.0%(42名)が100万

円未満と答えている。

では、これらの特徴は高齢女性の生活にどのような影響を与えているのだろうか。アンケート結果から見られる傾向の一つは、地域社会からの距離が生じることである。たとえば、自治会・町内会には全回答者のほぼ9割が参加しているのだが、男性の場合、70代、80代でも「参加していない」割合が微増にとどまるのに対して、女性は、70代で21.3%（10名）、80代で31.5%（17名）が参加していないと答えている⁽¹⁰⁾。そして、「同じ自治会の人と話す頻度」は、女性の場合年齢とともに増えていく傾向にあるのだが、そのピークは60～70代にあり、70代の55.1%（38名）が毎日話すと答えているのに比べ、80代以上では38.8%（28名）へと減少する。この点で男性に比べて女性では70代と80代の違いが目につく⁽¹¹⁾。

こうした状況は、食生活にも微妙な影響を与える。佐多の人たちは、週に1、2回まとめて買い物をする事が多く、高齢の女性でも、やや月に2、3回という割合が増える程度で、この傾向に変わりはない。ただし、これはアンケートから導き出すことはできないが、上記のインタビューにも見られるように、高齢女性の単身世帯では1回に購入される食品の数や種類は少なくなる。さらに、伊座敷の中心部以外では自宅の農産物や肉・魚の交換が食生活を支える重要な要素であるが、体力の低下や近所づきあいの減少によって、こうした食料供給が減ることはすでに見たとおりである。アンケート結果からも、とくにタンパク質や脂質について、高齢女性の多くがごくわずかししか摂取していないことが明らかであり、これは港区と比べても顕著な違いである。

他方で、佐多の高齢女性がさびしく、憂鬱な毎日を送っているわけではない。アンケートでは、孤独や抑うつなど現在の生活についての感

想と、自分の人生にたいする満足度などを複数の指標で質問した。当然のことながらこれらの質問に対する回答の傾向は互いに深く相関するが、佐多の高齢女性は、他の世代や男性に比べてもこうした満足度が低いとは言い難い。一例として、この一週間の間に「孤独を感じた」割合を表2に示そう。孤独や憂鬱といった思いについて単純に数字を比べることはできないが、上述のヒアリングなどからも、佐多の高齢の女性が豊かではないにしろ、これまでの人生を含めてそれなりに満足できる生活を送っているとは言えるだろう。

ただし、同じことがこれからの世代にもあてはまるかどうかは別の課題である。

3-2. 地域で生活する上での困りごと

表3は、「地域で暮らす上での困りごと」について年代別にまとめたものである。「防犯上の不安がある」「ゴミ出しのルールを守らない人がいる」など23項目の選択肢の中から、あてはまるものすべてを選んでもらった⁽¹²⁾。表3には、そのうちだいたい2割以上の人が挙げた項目を並べている⁽¹³⁾。

この表が示すのは、第一に「交通の便の悪さ」という佐多の地理的特徴がすべての世代を通じて挙げられていることである。そして、二番目に、これも全年代に共通して「近所に外食する店がない」が挙がる。伊座敷には数店の飲食店があるが⁽¹⁴⁾、いずれも小規模で会食には向かない。佐多岬の観光ホテルもしくは根占ないし鹿屋まで食事に行くには、帰りの運転が問題になる。これらは、多くの世代で挙げられた難点である「後継者不足」とも深くかかわっている。というのは、20代で佐多に戻ってくる人たちも少なくないのだが、その多くが再び出て行ってしまうというのである。

「まあ、一生ここに居られるかって言った

表2 年齢・性別にみた、最近一週間に「孤独を感じた」頻度

		孤独を感じた				合計
		滅多に、あるいはまったく感じなかった(1日未満)	いくらか、あるいはほんの少し感じた(1-2日間)	時々、あるいはある程度感じた(3-4日間)	ほとんどずっと、あるいはずっと感じた(5-7日間)	
男性	40代以下	19 73.1%	2 7.7%	5 19.2%	0 0.0%	26 100.0%
	50代	55 88.7%	6 9.7%	0 0.0%	1 1.6%	62 100.0%
	60代	54 80.6%	9 13.4%	1 1.5%	3 4.5%	67 100.0%
	70代	51 72.9%	10 14.3%	6 8.6%	3 4.3%	70 100.0%
	80代以上	21 70.0%	1 3.3%	5 16.7%	3 10.0%	30 100.0%
	合計	200 78.4%	28 11.0%	17 6.7%	10 3.9%	255 100.0%
女性	40代以下	9 64.3%	3 21.4%	1 7.1%	1 7.1%	14 100.0%
	50代	11 64.7%	4 23.5%	0 0.0%	2 11.8%	17 100.0%
	60代	21 77.8%	4 14.8%	2 7.4%	0 0.0%	27 100.0%
	70代	19 43.2%	15 34.1%	5 11.4%	5 11.4%	44 100.0%
	80代以上	26 55.3%	14 29.8%	5 10.6%	2 4.3%	47 100.0%
	合計	86 57.7%	40 26.8%	13 8.7%	10 6.7%	149 100.0%
男女計	40代以下	28 70.0%	5 12.5%	6 15.0%	1 2.5%	40 100.0%
	50代	66 83.5%	10 12.7%	0 0.0%	3 3.8%	79 100.0%
	60代	75 79.8%	13 13.8%	3 3.2%	3 3.2%	94 100.0%
	70代	70 61.4%	25 21.9%	11 9.6%	8 7.0%	114 100.0%
	80代以上	47 61.0%	15 19.5%	10 13.0%	5 6.5%	77 100.0%
	総計	286 70.8%	68 16.8%	30 7.4%	20 5.0%	404 100.0%

表3 佐多地区における主な「地域で暮らす上での困りごと」(年齢別)

	交通の便が悪い	近所に外食できる店がない	地域に後継者がいない	近所に日用品や生鮮食料品を買い求める店がない	保育園や学校、病院が近くにない	近所に食事やお弁当を運んでくれる店がない	地域や近くに仕事がない
全体	1位 (48.7%)	2位 (41.2%)	3位 (32.2%)	4位 (31.6%)	5位 (27.8%)	6位 (27.3%)	7位 (18.0%)
40代以下	1位 (58.5%)	2位 (51.2%)		4位 (36.6%)	3位 (46.3%)		5位 (31.7%)
50代	1位 (49.5%)	2位 (45.5%)	3位 (29.7%)	7位 (21.8%)	4位 (28.7%)	5位 (27.7%)	6位 (23.8%)
60代	1位 (46.3%)	2位 (44.8%)	3位 (35.8%)	5位 (28.4%)	4位 (32.1%)	7位 (23.9%)	6位 (26.9%)
70代	1位 (46.3%)	2位 (36.5%)	3位 (33.0%)	4位 (32.0%)	6位 (22.7%)	5位 (28.1%)	
80代以上	1位 (50.6%)	2位 (39.2%)	4位 (33.7%)	3位 (38.6%)	6位 (25.3%)	5位 (30.7%)	

註) 空欄は、6位以下かつ20%未満のセル(全体の7位を除く)。

ら、そういうような場所ではないので。ある程度、外をみてきたら、どこでも一緒だって達観できてくるんでしょうけど。まだ、遊び足りないじゃないですか、20代前半だったら。こっちにいても、例えば飲みに行くにも鹿屋まで1時間かかりますから。1時間かけて飲みに行って、代車で1万円かかる、そんなバカみたいじゃないですか。そういうのを考えてどっか他所にまた出ていくという感じの奴が、同級にも何人かいますね。」⁽¹⁵⁾

これらに続いて、「近所に日用品や生鮮食品を買い求める店がない」「近所に食事やお弁当を運んでくれる店がない」が多くの年代で挙げられている。高齢者についてはすでに見た通りだが、車が運転できる比較的若い世代にも日常の食事や買い物の不便が実感されていることがわかる。

これらに比べると「保育園や学校、病院が近くにない」「地域や近くに仕事がない」を挙げる人はとくに高齢者の間で少ない。これは、学校や職場の問題がないということではなく、逆

に、学校や職場を必要とする人が激減してしまった状況をあらわした結果だと考えられる。孫やひ孫について考えようにも町外に出て行ってしまっており、そもそも伊座敷周辺を除くと30代以下の住民がほとんどいない集落も珍しくない。仕事や学校の不足を実感することは少なく、こうした課題は後継者不足や交通の便に集約されるのだろう。

ただし、学校の存在は、佐多では地域生活の全般にかかわってくる。次に、このことから佐多の生活と交流についてみてみよう。

3-3. 地域における学校の意味と交流

2013年度から旧佐多町の小学校は一つにまとめられることになった。統合の必要性と葛藤について、佐多小学校PTAの役員の方は、次のように語る。

「私の場合はですね、2年ぐらい前に(統合の話)を聞いて。実際、自分の子どもの状態をみたときに、もう人数が少ないんですよ。まず子どもがどうしたら一番いいかということ

考えるときに、やっぱりたくさんの人と学ばせたり、遊ばせたりしたいと思ったものですから、統合は「あり」かなと(思った)。というのは、実際に言えば、統合をしてもらいたくないんだけど、(中略) そうなる時期かなという考えでいました。

(質問: 統合して欲しくないというのは、どのようなことからですか。)

やっぱり、一番は地域の活性化がなくなるといこと。それが、一番だったですね。運動会が出来ないとか、そういうのが。⁽¹⁶⁾

運動会ができなくなるというのは、小学校の運動会が集落全体の運動会でもあるのだが、それができなくなる、ということである。もちろん小学校がなくなっても残った運動場で集落の運動会を開催することは可能であり、その例もあるのだが、実際には用具の管理や開催準備等で学校の先生たちに頼る部分は少なくない。学校や役場などの援助を受けながら自分たちで続けても、競技参加者の高齢化もあって開催が困難になりがちで、実際、小さな集落ではそうした経緯をたどった。

運動会にかぎらず、学校はさまざまに地域の交流の場になっている。辺塚の話の中で祭り子どもについて触れたが、学校の行事にも、年配の人たちから伝統文化について学ぶなどの交流が盛り込まれていたりする。また、PTA も交流の場になる。

「先輩後輩の飲み会と PTA の飲み会が一緒ですね。前はヤンキースという野球チームがあって、そこに入っていたんですけど。その人たちともかぶっているんです PTA が。草野球が終わったあとに反省会をするじゃないですか。そのメンバーと PTA でよく会うメンバーは一緒だったりするんで。もう、結局、周りが出た顔というふうになってしまうんですね。」⁽¹⁷⁾

こうした環境では PTA に属しているだけで

周囲との交流も深まるし、人をいろいろな活動に引き込む契機にもなる。また、学校は文字通り「場所」としても活用される。PTA 活動の後には、学校近くの屋外で一次会、校長先生の家で二次会というパターンも少なくないという。これは、「外食できる店が少ない」という不便さを補っているとも言えるだろう。このように、小学校は地域の様々な面とのかかわりを持っている。

「経済的にも、先生がいるのとなくなるのとは(違う)、学校が無くなることによって、先生がいなくなるわけですよ。…生徒より教職員は多いんですから。事務職とかも含めて。…商店の売り上げとか、減るわけですよ。で、肝心なのは先生たちが、行事なんかをするときには、運動会とか、駅伝とか、集落単位・校区単位の行事をするときには先生たちが頼りだったんです。7、8人(の教職員が)みんな協力してくれましたからねえ。それも、もう出来ないねえ。」⁽¹⁸⁾

教育効果のために小学校を統合するのはやむを得ないとして、次に問われるのは、こうした機能を果たす場が徐々に縮小し、それを代替するものがないことである。町役場が根占に移り、商工会や農漁協も合併による広域化が進んでいる。それは、行事や活性化対策などを担う中核となる世代が地域から減ることでもあり、消費の減少によって店舗などが縮小することにもつながる。冒頭でみた辺塚の高齢の方々も、いまは歩いて集落の行事に行くことができる。だが、そうした行事を辺塚全体で行うようになれば、車でしか行けなくなる。誰かに乗せていってもらうためには全体の都合に合わせて家を出る必要があり、そうなれば体調次第で遅れていくことは難しくなる。地域の縮小と生活の不便さとの循環をどのように変えて、どの段階で維持できるようにするかは、佐多地区のとい

うより、全国的な課題だと思われる。

4. 地方の集落の維持における歴史と現在

4-1. かつての佐多における交通と集落

交通の不便さと過疎化とは直結するわけではない。かつての佐多地区は、今よりはるかに交通の便が悪く、人が歩く道さえ整備はされていなかった。大正8年から9年にかけての年越しを佐多で迎えた柳田國男は『海南小記』に次のような記述を残している。せっかくなので、2か所を続けて引用しよう。

「伊座敷の町からこの島泊まで、元はいちばん高い山の八分までを登って超えるのが、近いゆえに唯一の通路であった。しかるに隣の西方区を通って、最近に一間幅の路を一建立で開いた人がある。それが豊後からきた炭焼きだと聞いた時は、何だか古い物語のようで嬉しかった。」(柳田1925 [1961]: 25)

「大泊を過ぎて山の路にかかると、再び佐多の御崎が深緑に遠く見える。いくらでも曲がっていくらでも登るかと思うような路であった。処々に牛馬のためにやや緩傾斜のつづら折りが新たに開いてはあるが、使わぬとみえて草が生え、人は昔からの急な坂を通るのである。頂上を大泊のヨクと呼んでいる。ヨクは「いこい」という意味で、誰でもここへ来れば休む。三方の海が見える。島々も見える。さあ行こうと立ち上がると、おゆみが荷の上に結わえて、町へ持って出るコバの葉の束が、ガサガサと南国らしい音をたてた。」(同: 27)⁽¹⁹⁾

現在、佐多に住む方々にうかがっても、子どものころは山道を越えて通学するのが当たり前であり、道の重要な利用者は子どもだったとのことである。各集落では自給自足の手段があり、大人が日常に他地区に行くことは少なかった。それで生活が成り立ち、山の薪炭など多少ながら収入を得ることもできたので、冒頭で述

べたように人口も多かった。

この意味では、交通の不便さはむしろ町の形成をうながしたのである。宮本常一は、『民俗のふるさと』の中で、中国地方や三河地方のような山中に家々が散在しているような地域でも、街道に沿って、だいたい12キロくらいの間隔をおいて小さな町が形成されていると指摘する。12キロというのは、人間の歩くはやさとかかわっている。

「12キロのほぼ中間に住む人は、町まで行くのに片道1時間半かかる。それを往復すれば3時間になる。買い物などしてくれば半日の仕事であり、用事が多ければ1日の行程になる。ちょうどそれくらいのところに人はささやかな交易圏をつくったのであった。」(宮本2012: 65-66)

地形の関係もあって単純ではないが、旧佐多町の集落形成をこれになぞらえて考えることができる。佐多の中心である伊座敷は、現在南大隅町役場が置かれている根占まで直線でも15キロほど離れている。大泊や郡から伊座敷までは直線で5キロ程度、昔の曲がりくねった山道では10キロ以上になっただろう。辺塚はさらに遠い。したがって、伊座敷はこれらの集落にとって不可欠ともいうべき町であると同時に、日常の往来にはやや遠いのでこれらの校区ごとに学校が置かれ、その周辺にはわずかながら商店も並んだ。ヒアリングによるとこうした生活は1960年ごろまで続き、その後、道路やバス網の交通によって大きく変わってきたようである。

4-2. 佐多の観光開発とその盛衰

1962年6月に大隅半島の民俗調査を行った宮本常一は、1940年の調査時との地域の様相の違いを、たとえば次のように書いている。

「伊座敷は佐多町の中心となっている。船をおりて町をあるく。22年まえにくらべてすっか

りかわっている。まえにとまった昭和旅館の名も忘れており、町の道がひろくなっているので、前にとまった宿がどの家であったかよくわからない。それほど町は近代化している。…岬まで役場の自動車を出して下さることになった。今はよい道ができています。(22年まえに山道を一頭の牛が塞いでいて、動かないので=引用者註) 牛の腹の下をくぐった坂道は、いまだうなっているだろうと思ったが、新道は部落の上の方を通り、尾波瀬を経て大泊へ出る。そこからさきは観光会社が車道をつくって岬までゆくようにしている。」(宮本1995: 51)

このように、戦後の佐多の近代化は観光と道路が顕著な役割を果たした。ただし、それは一部にとどまる。伊座敷に薩摩半島の山川と結ばれるフェリー発着所がおかれ、佐多岬には観光ホテルがつくられたが、それ以外の地域、とくに日向灘側の集落には影響を与えることが少なかった。宮本常一が記すその対比は、過疎化の兆しを感じさせる。

「ここには戦後20年たっても文化の波はおしよせてはいない。前に通りあわせたとき、外之浦はせまい在所だとは思ったが皆瓦屋根になっていることに感心した。このあたりの家を瓦屋根にかえたのは、大正時代この海岸でたくさんのイワシが取れたからである。小台網にいくらでもイワシがはいった。そのため村が裕福になった。そのような活気にみちた日はそれ以後こないのである。」(宮本1995: 55)⁽²⁰⁾

その後、間もなく急速に道路は改良されていき、現在ではどの集落も脇道にいたるまで舗装されている。瓦屋根もどこでも珍しくはない。ただ、それが活気と言えるかどうかは別問題である。あわせて確認しておきたいのは、観光による隆盛が長続きしなかったことである。佐多の場合には沖縄返還によって「南端」という売りが弱まった面もあるが、それだけではない。

1960年代には宮崎県が新婚旅行のメッカと呼ばれたこともあり、九州最南端の佐多岬への観光客も多かった。だが、道路が便利になるにつれて、逆に地元は素通りされるようになった。伊座敷と山川とを結ぶフェリーも1980年に廃止された。改良された道路は、今日では通過するためのものになってしまったのである。

「今は、車の時代だから泊まる必要がないわけですよ。…ここでも宮崎ナンバーが来ますけど泊まる人はいない。あと「わ」ナンバーですね、レンタカーを借りてきて、さっと帰っちゃう。佐多岬まで行ってさっと帰っちゃう。…あの頃、交通手段といえば、観光バスだった。観光バスがきよったんです。(そのころ岩崎産業が有料の観光道路をつくったが) バスが、道も悪かったんですけど(そこにいたる道路が)くねくね道で、砂利道でも、観光バスでも通ったわけですから、岩崎は成り立っていたわけですから。」⁽²¹⁾

自家用車が普及し道路が改善されると、交易圏が広くなると同時に、地方はさびれていく。伊座敷と佐多岬の間のこの地帯には釣り客相手の民宿があるが、釣りも日帰りが可能になってその数も減ったという。観光だけのことではない。1973年発行の佐多町誌には、辺塚地区に「国有林関係打詰事務所」があって事務職員7名、常用28名で昭和34年から本格的生産事業が開始されたこと(佐多町誌編集委員会1973: 188)、馬籠地区に子牛の「せり市場」が存在すること(同: 197)、数年前まで佐多に2カ所、郡に1カ所の醸造所があったが後者は1963年に経営不振で閉鎖したこと(同: 230)、理髪店は伊座敷6、郡2、大泊2、辺塚1の計11軒が存在すること(同: 232)などが書かれている。とくに、年4回の「せり市」については、「せり日には市がたち、金物から果樹の苗木などまで出店がならび、他地方のおまつりのようににぎわいであ

る」と、隆盛が描かれている（同：197）。

言うまでもなく、現在ではこれらの面影を見ることはできない。酒造所も現在は旧佐多町内に1軒もなく、理髪店も伊座敷に1、2を数えるに過ぎない。それどころか、ほとんどの集落にあった小店舗も減少が続き、日常の小さな買い物さえ、車で出かけるか移動販売に頼るかいずれにせよ、伊座敷あるいは他町に頼らなくてはならなくなっている。

4-3. 現在の地域維持における他地域との交流

佐多地区の生活における他地域との交流の中で、買い物や通勤・通学・通院などと並んで大きな位置を占めるのは、他地域に住む出身者の存在である。その人たちは、たとえば一人暮らしの母親に会いに来たり、集落の重要な行事を手伝いに戻ったりする。と、同時に、いずれは佐多に戻ってくる場合もある。ただ、その数も減少しつつある。かつては町外で高校や大学を終えた人たちの何割かは帰ってきたが、職場が少なく、畜産の景気も下降して、その数は減っている⁽²²⁾。また、定年後に故郷に戻る人も減少しているという。長く遠方で暮らしていれば、配偶者も町外の場合が増えてくるし、帰ってきて年を取ってから子どもを頼ろうにも、別の町で生まれ育った子どもは佐多に住んでくれることはない。同級生が町に一定数住み続けている世代の人たちは、その懐かしさで戻る場合も多いが、卒業者の多くが町外に出てしまえばそれも難しい。この悪循環は少子高齢化を加速する。

家族がすべて町を離れても、佐多との関係は続き得る。空き家を維持するために時々帰宅する人もいるし、自治会の「準会員」として集落を支える場合もある。

「ここで生れ育って、住んでいる人は正会員

なんですよ、（自治会に）入らない人はいないんだけど、ここで正会員だった人が、仕事の都合とかで鹿児島辺りに出て、そこで生活して、（ただし集落に）家が残っている人たちには準会員をお願いしているわけですよ。600円くらい（の月会費で）なってもらっていたんですよ。（でも）準会員の人たちの声が、なんでわれわれは何もないのにいつまで払うのか、っていうような（声が聞こえてきたので）じゃあ、自由にしましようかって（多くが退会した）。」⁽²³⁾

集落には、簡易水道やテレビの共同アンテナなどの共同設備がある。また、共有林も持っている集落もある。かつては薪炭や木材などの収入源だった共有林も、現在では税金を払うだけの存在になり、売ろうにも売れない。自治会が地域の生計に直結するこの地域では自治会経費も都会より高いのだが、空き家の所有者にも半額くらいを負担してもらっていた。それが続くうちに、打ち切りの声があがってきたということである。

このように、町外に住む出身者の数が減り、その縁が薄くなることも、自治会維持を難しくしている。

5. むすび

これまでの佐多地区での調査を通して見えてきたことは、まず、過疎化の加速である。町村合併や小学校統合といった制度的な側面もさることながら、サルの行動範囲拡大などにもなう農地の縮小、観光施設の改廃なども目につく。ヒアリングのなかでも、とくに遠隔地の小集落では自治会の合併が予想以上に早く必要になるかもしれない、といった声が聴かれた。

と同時に、その中で高齢の方を含めて地域の住民が数字に表れる以上の豊かな生活を送っていることも印象的である。2節で紹介した方々も80代で一人暮らしを続けておられるが、足の

痛みなどがなかった数年前までは、農作業や近所の方との交流ももっと活発だった。現在でも、元気な高齢者は、米も野菜も自分でつくり、おすそ分けや交換で魚やイノシシ肉をもらうなど、自然の恵みを受けて、村の生活を楽しむことができている。

問題になるのはこの状態がいつまで続けられるかということだろう。自給自足が可能で、現状程度の交通手段が確保されていれば、高齢者主体の集落でも維持は可能である。だが、それを続けていくためには、いくつかの課題があるように感じられる。一つは、定年後に戻ってくるといレベルの人口維持さえ困難な集落が少なくないことである。二つ目は、人口減少とも相まって野生動物が増え、農業にも支障が出ていることである。三つ目は、役所、店舗、学校などの「結節機関」が壊滅しつつあることである⁽²⁴⁾。上述のように、自治会さえも合併の可能性が生じている。とくに、三番目の課題は行政的な施策にかかわる。「限界自治体化する佐多地区では集落総数45のうち限界集落が22(48.9%)と5割近くを占め」と指摘する大野晃は(大野2008:53)、南大隅町の「地域づくり」対策の厳しさとあわせて次のように書く。

「県人口の3分の1が集中する鹿児島市は行政機関や文化施設を集中させ、都市生活の質の高さを求める「コンパクトシティ構想」を進めている。この県都と大隅半島最南端に住む人びとの暮らしのギャップを県民はどうみているのだろうか。」(同:55)

この批判は、言うまでもなく全国に広げることができる。『都市と農村』の中で柳田國男が述べるように、都市は多くのものを農村から吸収してきたのであり、都市の成長も地方からの人口移動を主な源泉としていた(柳田1991:421-440)。その人の流れは、農村部から町へ、小都市から中核都市へ、地方から大都市へという方

向性がある。そのため、県庁所在地くらいの都市では、県全体の人口が減少し始めてからも人口増を続けていた。しかし、今日では、地方の大都市でも人口が減少に転じている。全国的な少子高齢化の中で、その影響が近い将来、東京などに及ぶことはほぼ明らかである。人口に限らず、産業や文化、社会的施設などをふくめて、全体的な拡大が困難な現状の中で、さらに都市集中を強めていけば、全国的な活力低下にいたる。

地域社会の振興策は、とくに自治体形成にいたらない集落単位では、基本的に地域内の自助努力に支えられてきた。このことは、担い手の中心がいわゆる中核世代で、その活動が地域の産業とも、その人たちの生計ともつながっていたために、これまであまり問題にされてこなかった。だが、過疎地の高齢化が大きく進んできた今日、地域の維持と産業活動とが必ずしも一致しない状況のもとでそうした集落の結節機関の価値をもう一度見直す必要があるのではないか。佐多地域は、そのためのモデルになり得る。

【注】

- (1) 南大隅町合併前に出版された追補版でも、佐多町の概要は人口減少から紹介されており、人口減少率が再び二けた台に増加し、「経済基盤の弱い中にあり産業構造上から、今後人口増加の兆しは見当たらない」などと書かれている(佐多町誌編集委員会2005:2)。
- (2) 昭和初期には辺塚から錦江町の田代地区に塩を運んでいたという話も聞いた(2012年2月20日辺塚でのヒアリング)。現在も、田代方面への林道のような県道と、海岸にそって内之浦に向かう県道が通っているが、他の道を経由したほうが早いため交通量は少ないという。
- (3) 2012年9月4日辺塚地区でのヒアリングによる。
- (4) 全国では約60%である。なお、全国統計のうち郡部だけをみると約53%であり、二人世帯数の

過疎化する地域社会の生活と交流

- 方が一人世帯数より多く、多世代同居も佐多に比べてかなり多い。
- (5) 2012年9月佐多支庁および2012年2月の地域内での住民の方からのヒアリングによる。
 - (6) 余談ながら、関連して放し飼いが禁じられたことも影響するという。放し飼いであれば鶏は勝手にえさをついばむが、柵や籠が義務づけられれば飼料を買うしかない。
 - (7) 2012年2月20日、辺塚地区でのヒアリングによる。
 - (8) 本調査は明治学院大学社会学部附属研究所と南大隅町佐多支庁との共同で実施された。地区と世帯による二段階層化無作為抽出でサンプリングを行い、有効回収票数662、回収率40.0%だった。
 - (9) 本文に記した事情もあり、回答者の女性のうち、66.8%が単身世帯である。とくに80代以上では単身世帯が8割を超える。
 - (10) 老人会への参加率についてもほぼ同様の傾向が見られるが、老人会は70代以上の全体として参加率が半分程度にとどまるため、違いも不明確である。全国に共通することだろうが、佐多でも年齢に達しても老人会に入会しない人が増えているという。
 - (11) これは、必ずしも男女の一般的な差を示すものではない。男性でも、とくに高齢単身の方は地域社会から遠く傾向があることはヒアリングでも耳にした。ただ、男性の場合は単身世帯の割合が低いことがこうした数字に表れている。逆に言えば、女性の方が体力や社会関係資本などが低下しても単身で生活できるということでもある。そうした方々が住みやすい状態をつくるのが、高齢化する地域社会の維持につながる一つの方法だろう。
 - (12) 23項目のほかに「その他」があるが、具体的な記入は少なかった。
 - (13) 表3以外に、40代以下で「仲間・友人と集まって話す場所がない」(22.0%)、80代以上で「山坂が多く近所を出歩くのが大変である」(21.1%)、「庭木や家の手入れが大変である」(22.9%)、「ひとり暮らしの見守りが必要だができていない」(22.9%)を、2割以上の人が選んでいた。こうした世代差にも注意が必要だろう。また、性別にみた時、保育園や学校に関する項目を選ぶのは女性が多いなどの傾向はあるものの、年齢ほどの顕著な差はなかった。
 - (14) 中でも『食事処時海(ときみ)』は、佐多である新鮮な魚介のおいしさとマスコミのグルメ情報にも取り上げられるほどであるが、「違い」という説明が付くことが多い。
 - (15) 2012年2月20日佐多小学校でのヒアリングによる。話し手は小学生の子をもつ男性。
 - (16) 注15と同じヒアリングによる。話し手は小学生の子をもつ別の男性。
 - (17) 注15と同じ。
 - (18) 2012年2月19日尾波瀬地区でのヒアリングによる。
 - (19) 島泊は伊座敷から佐多岬に向かう隣の入り江に位置する集落。なお、現在の主要ルートは西方をとって尾根をトンネルで超えている。大泊は日向灘に面し、海岸沿いに外之浦方面に向かう道と岬に向かう道がここで分岐する。「おゆみ」はこの集落で柳田が荷物の運搬を頼んだ女性。コバは枇杷樹。余談ながら、ここでの年越しは新暦であり、この地域の正月は旧暦で祝われていたので、日常と全く変わらなかったという。
 - (20) 同書の中には、大中尾の開拓集落が戦時中にアメリカ軍艦載機の爆撃を受けたこと、昭和10年ごろからそのまま移住につながる出稼ぎが増えてきたこと(同:72)、辺塚地区にミサイル発射の自衛隊演習場が受け入れられようとしていること(同:78)、などの記述も見られる。
 - (21) 注18と同じ。
 - (22) ただし、大手畜産業の「南洲農場」は現在も重要な雇用先である。ほかに縫製工場などの職場もある。
 - (23) 注18と同じ。
 - (24) 結節機関とは、人々の交流の節目となるような機関を指す(鈴木1957[1969])。その集積は都市の定義にもかかわるが、農山漁村にも結節機関は存在する。

【参考文献】

- 今井幸彦編著 1968 『日本の過疎地帯』岩波新書。
宮本常一 1995 『宮本常一著作集39』未来社。
宮本常一 2012 『民俗のふるさと』河出文庫。
長濱一夫・水谷史男 1985 「出稼ぎ送出村落の実態」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』15: 28-47。
大野晃 2005 『山村環境社会学序説』農山漁村文

化協会.

大野晃 2008 『限界集落と地域再生』信濃毎日新聞社.

佐多町誌編集委員会編 1973 『佐多町誌』佐多町.

佐多町誌編集委員会編 1991 『佐多町誌』佐多町.

佐多町誌編集委員会編 2005 『佐多町誌 追補』佐多町.

曾根英二 2010 『限界集落』日本経済新聞出版社.

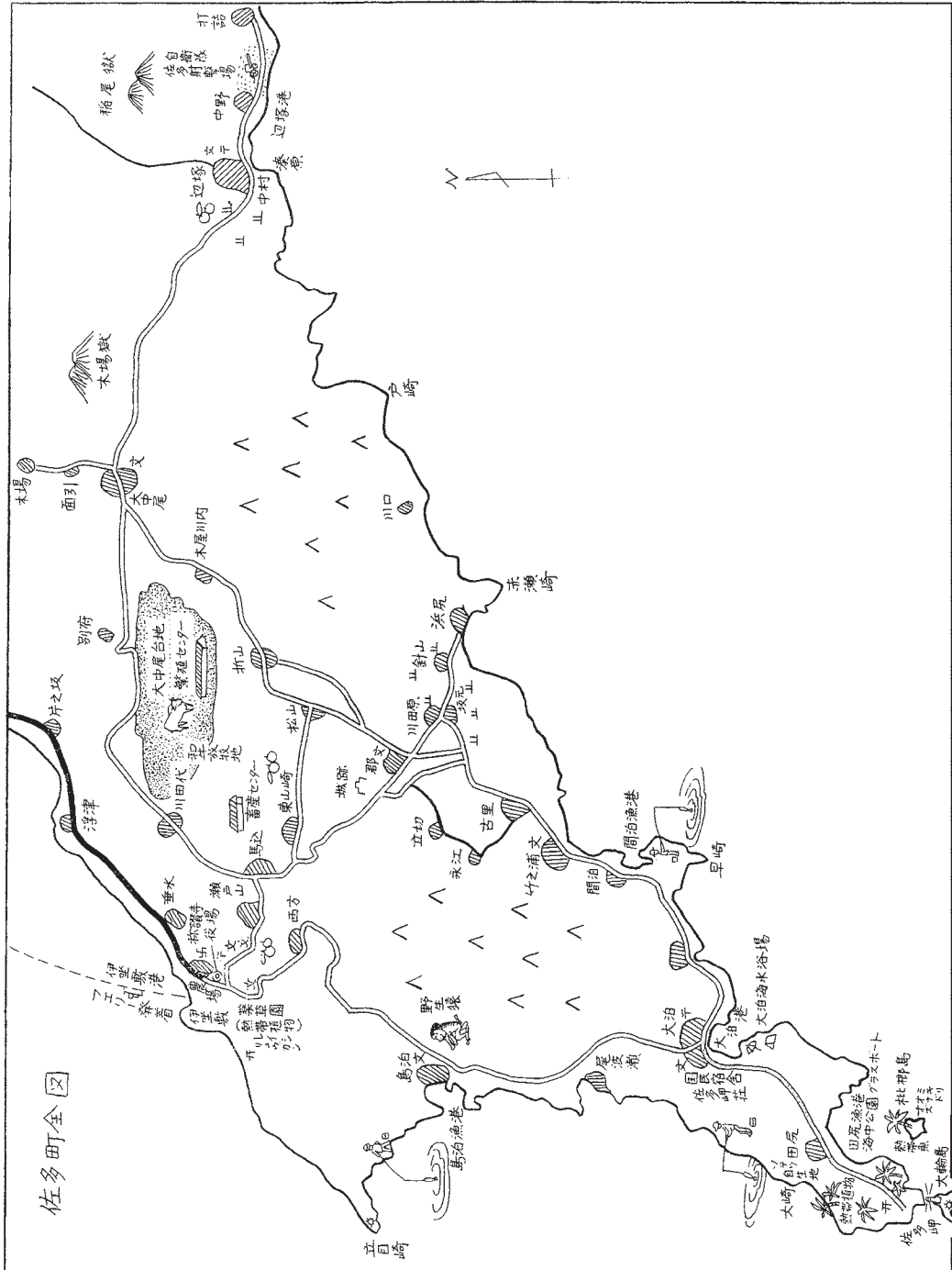
鈴木栄太郎 1969 『鈴木栄太郎著作集6 都市社会学原理』未来社.

山下祐介 2012 『限界集落の真実』ちくま新書.

玉里恵美子 2009 『集落限界化を超えて』ふくろう出版.

柳田國男 1961 「海南小記」『世界教養全集21』平凡社：3-98.

柳田國男 1991 『柳田國男全集29』ちくま文庫.



佐多町全図「佐多町誌」佐多町誌編集委員会編 1991年